

「関東大震災あれから 100 年」

加藤由加里・八巻恵美子・砂崎友梨（南足柄市立図書館）

■ はじめに

昨年（2023（令和 5）年）は日本の地震災害で最も多くの犠牲者を出した 1923（大正 12）年関東大震災から 100 年の節目でした。揺れに加え、発生が昼時であった事や日本海側にあった台風の影響による関東各地の大火災、津波、土砂災害など複合的な原因によって、犠牲者は 10 万 5 千人余にのぼりました。また、近代の大地震として南足柄市に最も近い震源を持つ地震であることも忘れてはなりません。

南足柄市立図書館では関東地震 100 周年にあたり、当時を知る方々による貴重な記録や後の調査研究の資料、県西地域の震災時の写真などから関東大震災の状況をまとめ、その記憶・教訓から、災害に備え防災・減災について考える一助として、企画展示「関東大震災あれから 100 年」を実施しました。ここではこの企画展示の内容をその後の調べに基づく追記を含め紹介します。

■ 「その時」南足柄は—図書からたどる関東大震災—『関東大震災体験記』

震災から 60 年の節目にあたり震災を体験された方々が執筆された文章を纏めた本が、南足柄市から発刊されました。それが『関東大震災体験記』（南足柄市編、1984）です。その巻頭では、故河角廣博士（東京大学名誉教授）の六十九年周期説に触れており、当時すでに危険期に入っているという危機感があり発刊に至ったと思われます。震災から

表 1 企画展示の内容

タイトル	展示期間
「関東大震災あれから 100 年」	令和 5 年 9 月 1 日（金）～ 11 月 30 日（木）
「自然災害伝承碑が語る関東大震災」	令和 5 年 9 月 1 日（金）～ 11 月 30 日（木）
「地震計」	令和 5 年 9 月 1 日（金）～ 9 月 30 日（土）
「災害食・災害時トイレ」	令和 5 年 11 月 1 日（水）～ 11 月 30 日（木）
「関東大震災あれから 100 年そして、防災へ」	令和 5 年 11 月 1 日（水）～ 11 月 30 日（木）



写真 1 企画展示の様子

60 年後とはいえ、人々の語る体験は生々しく「その時」の情景を伝えてくれます。ここでは、本書から地震発生時の様子を抜粋して紹介します（ほぼ原文のまま。末尾の括弧内は地区名）。

- ・突然下から持ち上げるように「ズシン」と大きな音（雨坪）
- ・大砲でも打ったかのような大きな音（生駒）
- ・物凄いドーンとする音とともに激しく揺れはじめた（狩野）
- ・突然体が宙に浮くように突き上げられた（荻野）
- ・一週間以上、大きな地震がたびたび揺ってきた（弘西寺）

- ・地面はひっきりなしに揺れていました（斑目）
- ・大きな地震が繰り返し起き、その間小さな揺れは連続して起き、揺れていない時間の方が短いのです（矢倉沢）
- ・何分後かわかりませんが、一回目に準ずる地震がありました（上怒田）
- ・最初の地震で四、五分あった～中略～二度目の地震が起き、上下の震動で前より大きく、見ている間に家がつぶされてしまいました（千津島）

体験には「突然」「急に」という言葉が目立っています。大きな前兆

もなく不意の激震で人々が戸惑う姿が想像されます。更に余震がひっきりなしに、しかも長い期間にわたって襲ってきます。また、最初の地震で持ちこたえた家屋も歪みや破損が生じ、余震で倒壊してしまう描写もあります。これが余震の怖さであり、気を付けたいところです。図1は展示にも利用した余震分布の図です。本震発生から約30日の間に発生した地震を示しています（気象庁HPより）。当日から数日間は絶え間なく余震があったことがわかります。

表2は南足柄市史に記録されている市内の家屋の被害状況です。岡本村での建物被害が顕著なのがわかります。市内全域でみると家屋はもちろんのこと、石垣も崩れ、道路や山地、畑地など被害は甚大でした。被害に関する記述を抜き出してみます。

- ・庭には15cmぐらいの地割れが膝まで入るぐらいの深さで出来て

- いた（荻野）
- ・庭の真ん中から、太い水柱が三メートルくらい高く噴き上がりました～中略～屋敷の東側に川があったが、地割れに沿って入った川の水が、地震で地面が揺れる毎に、水鉄砲式に噴き出したのだった（駒形新宿）
- ・家は半壊、あちこちに水を吹いたあとがあった。水は地が割れ、四～五尺程吹き出した（生駒）
- ・道路は凸凹になり、各所に亀裂ができて、川添いの道路の亀裂からは、地震の揺れる度に水柱が立つという有様であった（狩野）
- ・矢倉岳の天狗鼻が崩れ始め、がらがらと岩石が転がる音とともに、空高く土煙りを上げながら崩れ落ちる様相（矢倉沢）
- ・地震が起きると同時に、山一面崩れ土煙りにて曇ってしまい、大口の堤防は三尺も割れて飛び越すようであった。当時橋は石橋なの

- で落ち、大口の水門も壊れ、川の水は止まり、川には色々な魚が多くいた（斑目）
- ・何十年何百年もとまらぬ酒匂川も水無し川となりました（千津島）
- ・井戸水は出ないし、川にも水がないし非常に困りました（福泉）
- ・井戸は崩れて使えず、小川はずたずたに断ち切れ、水がなくなりましたが、地下水が上昇したのか、窪地の割れ目から水が湧き出したので、水は間に合いました（向田）
- ・電柱は倒れ、石垣は崩れ、道路は亀裂を生じ、用水はせき止められた（内山）
- ・水路、田畑の畦畔は崩れて落ち、流れていた水は止まり、井戸も崩れたり埋まったりして、飲み水にも困るようになりました（弘西寺）
- ・地震のあと、川にも堰にも水はなくなり、水に困ったので、私の家では井戸を掘りました（荻野）
- ・大雄川上流の最乗寺山と狩野大神平の谷間が、がけ崩れのためせき止められ大きなダムが出来、これが一度に切れ流れ出た時を心配して飯沢部落数班に分かれて、数回にわたり切流し工作に繰、スコップ等を持って、山に登られた（飯沢）

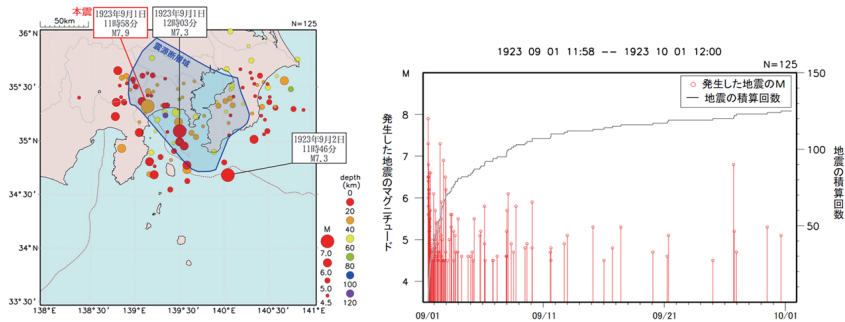


図1 関東地震後に発生した地震（左）震源分布（右）MT図
（気象庁 | 大地震後の地震活動（余震等）について | 大地震後の地震活動（余震等）に関する基礎知識（気象庁, 2023）

表2 地震による旧4か村の被害状況（市史7表5－24）

村 名	全 壊戸数	(%)	半 壊戸数	(%)	計	総戸数
南足柄村	60	(10)	138	(22)	198	(32) 618
福沢村	75	(17)	140	(31)	215	(48) 449
北足柄村	53	(17)	191	(61)	244	(77) 315
岡本村	247	(43)	322	(56)	569	(99) 570

地割れや液状化現象が多数起き、井戸水は濁ったり枯れたりし、更に土砂崩れ等により川や用水にも水がなくなりました。土砂崩れで堰き止められた河川に出来た土砂ダムによる土石流を防ぐために、人々は団結して工事をしました。被害は甚大でしたが、人々はすぐに復興にとりかかったことがわかります。次に復興に関する記述を抜き出します。

- ・区の話し合いにより、一に水が必要だといって水路の修復と水上げに、二に道路の修繕に、三に家起こしが始まりました。家起こし

は、三つに分かれて各部落総出で行いました（内山）

- ・十三軒の組内で、麒麟*（手動式起重機）などを購入し、一致協力して復興作業にかかったので、半壊した家々も数日でどうか住めるようになった（怒田）

- ・班目部落にて麒麟を2〜3丁買い、鳶職は〜中略〜共同して家起こしに回った（班目）

- ・早々部落話し合いのうえ、隣組単位で毎日毎日勤労奉仕で家起こしをした（三竹）

- ・各戸の家の修繕には、村の仕事師と働き盛りの若い人数人の応援を得て始められたが、二〜三か月を要した（和田河原）

- ・名古屋まで麒麟4基を買いに行き、お互いに協力して家の立て直しをしました（雨坪）

- ・麒麟を購入〜中略〜交通の便もないところを御殿場まで、まだ余震のある中を機械の購入に行った。残った者は、全員で山から家起こしに使う丸太をとり、これを道もない山の中を長いまま担ぎ出し、復旧の第一歩を踏み出した（狩野）

- ・隣組で力を合わせて順番に家を直した（荻野）

- ・沼津方面まで歩いて、麒麟を買いに行って〜中略〜家起こしはたいへんな仕事です。まず、畳を全部あげ、床板を離して、大黒柱やおもな柱にやりずか丸太をかい、丸太の尻へ板をあて、板と丸太の間に麒麟を入れ、ねじを回して家の傾いたのを起こし、筋違いで止めます。一戸の家起こしでも二日位かかりました。村中の家起こしを済ませるには、一か月もかかりました（弘西寺）

- ・村中の人々が協力して傾いた家を起こしたり、道具等も組内で御殿場、沼津方面より買い求めた（関本）

道路も寸断され、鉄道も止まり、徒歩でしか移動手段が無い中、御殿場や沼津、名古屋まで麒麟や道具を買いに行く等、まさに住民同士の助け合いによる復興でした。

*麒麟（麒麟ジャッキ）＝スクレージャッキ：重量物の揚重・降下・移動に使用する工具。ねじを回転させると推力が生ずるが、これを応用したジャッキ。（『建築大辞典』より）

『学校沿革誌』

学校沿革誌とは各学校によって編纂される学校の歴史や変遷を記した資料です。明治時代から編纂され、永年保存文書として保存されてきました。当時の校長先生方が綿密に記したその内容は学校のみならず、郷土の歴史を知る上でも貴重な資料です。

2023（令和5）年春、岡本小学校・南足柄小学校・福沢小学校に伺い、現物を拝見させていただきました。紙の変色はあるものの、どの小学校も大切に保管されていました。その中には関東大震災についての記載も多くあり、被災の状況から復興までの様子が記されていました。

なお、震災当時三校の名称はそれぞれ「岡本村立岡本尋常高等小学校」、「南足柄村立南足柄尋常高等小学校」、「福沢村立福沢尋常高等小学校」でしたが、本稿では現在の名称で記述します。

① 地震が起きた時の様子

岡本小学校沿革誌（写真2）は「俄然大音響とともに大地震来たる（振幅4寸震源地相模湾）一壁落ち羽目破れガラスは八方に飛び、実に激烈」、南足柄小学校沿革誌（写真3）は「古今未曾有の一大事変一俄然天地を震撼せる一大響音と共に大震

動、天柱折れ地維砕くるの感」、福沢小学校沿革誌（写真4）は「未曾有の大地震」とあります。『関東大震災体験記』と同様に、突然な激震に襲われた様子が記されています。三校とも校舎は大破し、理科室から出火しましたが、余震の続く中、職員等が消火に努め大事に至りません

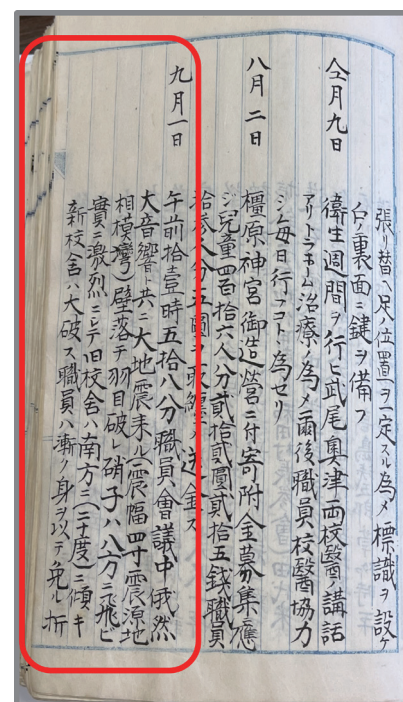


写真2 南足柄市立岡本小学校沿革誌。赤枠部分が地震の記述。

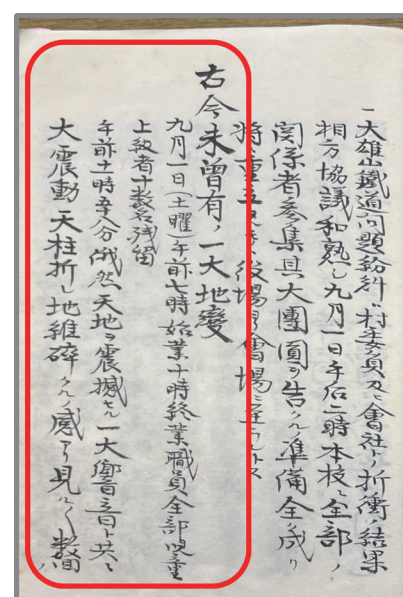


写真3 南足柄市立南足柄小学校沿革誌

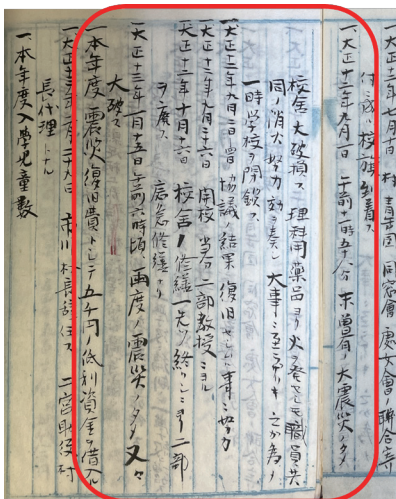


写真4 南足柄市立福沢小学校沿革誌

でした。また、地震が発生した9月1日は土曜日で新学期の始業式であったため、ほとんどの児童が下校していたのは不幸中の幸いでした。

②復興に関する記述

三校とも、校舎が大破するなど大きな被害を受けました。復旧に向かうそれぞれの様子はどうだったのでしょうか。

岡本小学校は9月11日、部落青年団による校舎倒壊防御工事が行われました。9月20日児童招集。同日富士郡吉永村、岩松村在郷軍人分会員15名による校舎復旧工事が3日間行われました。そのおかげで10月1日には二部授業、さらに12月25日に本授業に戻ることが出来ました。本格的な校舎復旧工事は11月22日から村にいる全とび職・大工で行われました。なお、10月24日には壊滅的な被害を受けた横浜に797冊の教科書を送った一方、翌年1月9日には大阪市よりオルガン、地図、小黒板などが寄贈されました。

南足柄小学校は9月12日に児童招集。9月16日からは午前中授業が始まり、10月1日には本格的に授業が始まりました。また、古教科書を横浜市第三南吉田校（原文マ

マ；現在の横浜市立南吉田小学校か？）に送っています。

福沢小学校では地震の翌日には復旧についての協議を行っています。9月26日に二部授業が始まり、10月16日には校舎の修繕がほぼ終わったため二部授業を終了しました。

復旧に際し、人々は速やかにとりかかり学校の本格始動を目指しました。地域の人々のみならず、青年団や在郷軍人などの応援を得ての活動は、現在のボランティア活動を思わせます。そして、自らも被災者であるにも拘わらず、大火災で焼失してしまったであろうと遠く横浜まで教科書を寄贈していたことに驚かされます。

南足柄市の「その時」を「関東大震災体験記」と「学校沿革誌」から浮かび上がらせてみました。人々の記憶と記録は私たちに様々なことを教訓として遺してくれました。道路や山地の崩落、家屋の倒壊による被害をどうやったら少なくできるか。水や食料、生活用品の備蓄を万全にしなければならない等、今後来るであろう「その日」に備えることはたくさんあります。

100年前の関東大震災による被害は甚大でしたが、復興への大きな力になったのは、住民同士の助け合いや他者を思いやる気持ち、郷土愛を携えた人々の力だと感じました。「関東大震災体験記」と「学校沿革誌」。これらの資料は、過去と未来を繋ぐ貴重な資料です。過去の記憶と記録は防災について考える道筋です。災害に備え安心できる未来を作らなければならないと強く感じました。

■ 作家と震災

関東大震災、都市は壊滅、報道や情報は錯綜し流言蜚語が飛び交いま

した。作家たちは新聞社や出版社を通し、自らの体験を記事や随筆、または日記として発表しています。作家は恐怖と混乱の中、目の前の事実を、感情や思想を、どう表現したのでしょうか。南足柄市立図書館の蔵書を手掛かりに探ってみることにしました。

てらだとらひこ 寺田寅彦

1878（明治11）年生まれ。高知県出身の物理学者、文学者。文学者としては、主に随筆を執筆。科学者のまなざしで日常を切り取った随筆や叙情性に富んだ優れた小作品を残している。

“天災は、忘れたころにやってくる”この言葉は、地球物理学者であり随筆家である寺田寅彦の言葉がもともになったといわれています。代表的な随筆の一つ『天災と国防』の中にその表現を見ることができます。

・『寺田寅彦随筆集 第五巻』「天災と国防」より

「文明が進む程天災による損害の程度も累進する傾向があるといふ事実を十分に自覚して、そして平生からそれに對する防禦策を講じなければならない筈であるのに、それが一向に出来ていないのはどういふ譯であるか。その主たる原因は、畢竟さういふ天災が極めて稀にしか起こらないで、丁度人間が前車の顛覆を忘れた頃にそろそろ後車を引き出すやうになるからであろう。」

全く同じ言葉が文字として書かれたものはないようですが、防災の格言のごとく今も生きています。また、高知県の寺田邸跡の碑文には“天災は忘れられたる頃来る”と刻まれています。

・『寺田寅彦随筆集 第五巻』「震災日記」より

9月2日の日記からは、震災の惨事の中に科学者の冷静な一面が見えます。上野公園付近では「○○人の放火者が徘徊している」「井戸に毒を入れる」「爆弾を投げる」との浮説が聞こえ、まわりが右往左往する中、科学者は反面、「こんな場末の町へまでも荒らして歩く爲には一體何千キロの毒薬、何萬キロの爆弾が入るであろうか」と目の子勘定をし、信じられる話ではないと記述しています。

・『寺田寅彦と物理学』「関東大震災に遭遇して」より

「わたしは、関東大震災の当時は物理学教室に属しており、物理学の研究範囲として『地球物理学』がありましたが、まだ地震学や火山学や海洋学や気象学などへの分化があまり進んでおらず、わたしもこれを機会にして本格的に地震学そして災害科学（津波、火山、火災など災害にかかわる分野）の研究に従事することになりました。」「地震が起こった当日は二科展の展覧会を鑑賞している最中で、その足でひとり地震被害を見るために東京中を歩きまわりました。」「文部省に設置されている『震災予防調査会委員』に任命されていたこともあって、専門家として地震の惨状をくわしく調べようと考えたためです。」

「わたしは、関東大震災が起こった直後に、そのころ凝っていたローマ字で「事変の記憶」という文章を書きました（1923（大正12）年10月発表）。そこでは最初に、「今度の地震と、そのために起こった大火事によって、我々はめったに得られないが経験を経験をなめさせられた」「この経験を

よくかみしめて味わって、そうしていつかはまた起こるべき同様な災いをできるだけ軽くするように心がけたいものである」

震災予防調査会は、地震被害を最小限に食い止めるための研究機関で、1891（明治24）年の濃尾地震後、勅令により発足しました。寺田寅彦はまさに在任中、関東大震災に直面し活動していました。

ここに示されたように、経験の記憶をうすれることなく繋いでいくことが防災の基本にあると強く感じます。

あくたがわりゅうのすけ
芥川龍之介

1892（明治25）年生まれ。東京都出身の小説家。1916（大正5）年東京帝大在学中に発表した「鼻」が夏目漱石に評価され文壇に登場。1919（大正8）年大阪毎日新聞社社員として文筆活動に専念。震災時は、東京都に居住。

芥川はその鋭い感性で、震災直後の惨事に対しての思いを述べています。

・『芥川龍之介全集 第10巻』「大震災日録」より

九月一日。

ひる午ごろ茶の間にパンと牛乳を喫し了り、将に茶を飲まんとすれば、忽ち大震の来るあり。母と共に屋外に出づ。妻は二階に眠れる多加志を救ひに去り、伯母は又梯子段のもとに立ちつつ、妻と多加志を呼んでやまず、（中略）この間家大いに動き、歩行甚だ自由ならず。屋瓦の乱墜するもの十余。大震漸く静まれば、風あり、面を吹いて過ぐ。土臭殆ど噎ばんと欲す。

・『芥川龍之介全集 第10巻』「大震に際せる感想」より

「この大震を天譴と思えとは渋沢子爵の云ふところなり。誰か自ら省れば脚に疵なきものあらんや。脚に疵あるは天譴を蒙る所以、或は天譴を蒙れりと思ひ得る所以なるべし。／不公平なる天譴を信ずるは天譴を信ぜざるに若かざるべし。／自然は人間に冷淡なり。大震はブウルジョアとプロレタリアとを分たず。／自然の眼には人間も蚤も選ぶところなしと云えるトゥルゲネフの散文詩は真実なり。／自然は人間に冷淡なり。されど人間なるが故に、人間たる事實を輕蔑すべからず。人間たる尊厳を抛棄すべからず。」「天譴などと信ずることなかれ。／人間を樹立せよ。否定的精神の奴隷となること勿れ。」

地震発生時の様子を写實的に記した「大震災日録」の表現とは異なり「大震に際せる感想」では、多様な震災の表現のなかでも、芥川の独特の眼が人々の心理や動揺に触れ、極限の状態となった人間の精神を奮い起こそうと独自の言葉を強く重ねています。

たにぎきじゅんいちろう
谷崎潤一郎

1886（明治19）年生まれ。東京都出身の小説家。同人誌「新思潮」（第二次）を創刊。作品を評価され作家に。反自然主義の旗手としてデビュー。1919（大正8）年小田原十字町に転居。1921（大正10）年横浜へ転居。仕事のため箱根滞在中に被災。

震源に近い神奈川県箱根山周辺では多くの崩落が発生し、人的被害やインフラ被害の記録が残っています。谷崎はまさにその地域で被災し

ました。地震発生時の状況や土砂災害、天候の変化、小田原の大火を望んだ一部始終を読むことができます。

・『文豪たちの「九月一日」』『全滅の箱根を奇蹟的に免れて』より

箱根町の芦の湖畔のホテルから乗合自動車に乗って芦の湯を通り、約半里位も来た山路で地震に遭った、乗合は満員で約半数が西洋人だった / 山の左側は高い崖で、そこから大きな石がゴロゴロ落ちてくるし右の方は深い谷で一本道が柔らかい土でボロボロ壊れて見る見るうちに路がなくなってゆく / 運転手はこのところは危険だからとめられない、安全なところまで走ってゆくといい / 烈しい震動の中をドンドンと一丁程走らせた、走っている最中も路が崩れていった、今考えてみると谷へ落ちなかったのが不思議な位だ

小涌谷の警察分署はマッチの箱のように仰けさまに谷に落ち / 間もなく午後の三時頃になって遥かに宮の下の方から燃え上がる火の煙がみえた / 地震が揺ると同時に気候が全く一変した様で午前中は風があり少し霧雨が降っていたのに空がクッキリと青く晴れて風が全く死し実に物凄いほど静かであった、そして非常に暑かった / 恐怖というよりは船に酔ったような気持ちで頭がノボせて腹がへっ

夜になってからは山の向こうがポーッと舞台装置の電気のように明るかった其光は寧ろ青みを帯びていて火事ではないように思われたがそのうち雲が出てくるとその雲だけ真っ赤にみえた、其夜晩く

なって小田原が大火だということを知った

その後、横浜の自宅には戻らずなぜ大阪を目指したのでしょうか。谷崎潤一郎の弟、谷崎終平の著書から谷崎のその後をたどることができます。

・谷崎終平 / 著『懐しき人々 兄潤一郎とその周辺』より

兄は箱根から横浜に出ようとしたが、道が崩壊していて汽車も不通で行かれず、また戒厳令で東京へも這入れぬという。やっと徒歩で沼津に出て、取りあえず関西へ行った。「朝日新聞」に辿りついて援助を乞い、上海丸で横浜に出る。これがまた都合よく今東光氏の父君が船長である会社の船で、新聞社の腕章をつけて、今家に至ると・・・

この記述から、谷崎の手記「全滅の箱根を奇蹟的に免れて」がなぜ非常に早い時期に『大阪朝日新聞』（大正十二年九月六日）に掲載されたのか、その経緯がよく分かります。

きたはらはくしゅう
北原白秋

1885（明治18）年生まれ。熊本県で生まれ生家は福岡県柳川市。1918（大正7）年小田原に転居。児童雑誌「赤い鳥」の童謡、児童詩欄を担当し作品を次々と発表。震災時は、小田原に居住。

白秋は小田原の地で被災しています。『大震抄』「天意下る」では“天地（あめつち）の譴怒（いかり）”とあるように、驕（おご）った国民の心によって震災がもたらされ、禍津日（まがつび）の神によって、禍害・凶事がひき起こされたとする震災天譴論を踏まえた表現がされています。白秋は「木菟の家」に住んでいまし

たが、震災により半壊し、付近の竹林で避難生活を送っていました。

・『大震抄』天意下るより

世を挙げて心傲ると歳久し天地の
譴怒いたゞきにけり
地は震へ 轟き亨る生けらくや
たちまち空しうちひしがれぬ
大御怒避くるすべなしひれ伏して
揺りのまにまにまかせてぞ居る
言挙げて世を警むる国つ聖いま顕
れよ天意下り
大王は天の譴怒と躬自ら照らす
御光も謙しみたまえり
国民のこのまがつびは日の本し下
忘れたる心ゆれ来り
大正十二年九月ついたち国ことごと
と震享れりと後世警め（以下省略）

南足柄市立図書館の蔵書「宮田文庫」に、北原白秋の『白秋全集Ⅶ 歌謡集』（アルス昭和四年九月十五日発行）があります。アルス（ARS）は、白秋の弟である北原鐵雄が設立した出版社です。美しい装丁を開くと“地震年”の歌を見つけることができました。

土砂崩れにより甚大な被害を受けた「根府川」「箱根」も歌われています。

函根（箱根）

崖は壊んでも / 龍膽はつぼむ。 /
道の根ざさにや / 露がのる。 /



写真5 北原白秋

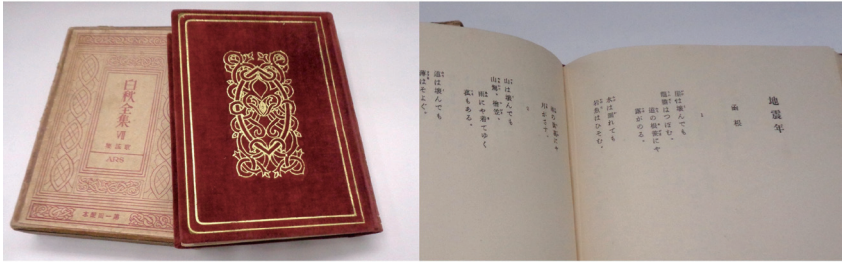


写真6 白秋全集 VII 歌謡集

みづ か いわな
水は涸れても / 岩魚はひそむ。 /
さわ まくず つき
澤の眞葛にや / 月がさす。
やま く やまかご ひがさ
山は壊んでも / 山駕、檜笠、 /
あめ き こも
雨にや着てゆく / 菰もある。 /
みち く ススキ
道は壊んでも / 薄 はそよぐ、 /
せきしよ うま こ
もとの關所は / 馬で越す。

家はつぶされ
いえ ひ や
家はつぶされ、 / 火に焼けだされ、 /
き すずめ
着のみ雀か、 / ちりぢりに。 /
の ら き み
野良へ来て見りや、 / なまなか、
こはる あぜ よめな はな
小春、 / 畦は嫁菜の / 花ざかり。

根府川
おらがお里を / 誰が知るづらか、 /
いまは地のそこ、 / 岩のそこ。 /
な ちどり あめ
啼けよ、千鳥よ、 / さんさの雨だ、 /
うみ みかつき しけ
海にや三日月、 / また時化だ。

田鴨
ことし じしんどし ち ち わ
今年や地震年、 / 地に地が割れた。 /
まめがき う
あかい豆柿 / なぜ熟れた。 /
かき み あか
柿のもみちは / 實よりも赤い。 /
おらがお里は / まだ寒い。 /
く だんだんだ
壊えた段段田に
いねこ たしぎ た しぎ
稲抜き、しごき、 / 田鴨、立つ鴨 /
み くらす。

世直し
どうせよなおし、 / 壊えるなら壊え
ろ、 / 胡麻の花ちりや、 / 實が充
る。 / どうせ世直し、 / 焼けるな
ら焼ける、 / 野火がつつ走らなき
や、 / 芽が萌えぬ。

おざきかずお
尾崎一雄

1899（明治32）年生まれ。三重

県出身の小説家。小田原郊外の下曾
我で育つ。志賀直哉に師事。心境
小説『虫のいろいろ』（1948（昭和
23）年）、客観小説『すみっこ』（1955
（昭和30）年）などの力作を残して
いる。小田原にて被災。

・『尾崎一雄全集 第十三巻』「あの日
この日（上）」二十三 関東大震
災、その被害状況より

丁度、下隣の山村家の茶の間で、
昼食の食パンに手を出そうとした
とき「ミシリガタガタと来たので、
顔を見合わしてみると、ドカンと
突き上げられ、二人共あぐらのま
ま飛び上がった。つづいて、横ざ
まに薙ぎ倒された。畳が生きもの
のやうに動き、部屋中の物が一度
に倒れてきた。/「でかいぞ！」「地
震だ！」 / 手近い西向きの濡縁か
ら戸外へ飛び出した。飛び出した、
といふより、抛り出されたという
方がいい。 / そのとき、平屋建
ての家が東側へ倒壊した。 / いっ
たん轉がると起きるのがむずか
しい / 地面がこんなに浪打つとは
一。深い深い底無しの無力感— /
五分経つたか、十分経つたか、ど
うやら歩けさうになった

「あの日この日」上下巻は「群像」
に、1970（昭和45）年から4年
にわたり連載された総枚数2100枚
におよぶ自伝的回想です。断層を間
近にした土地の被災状況が詳細に表
現されています。家族や隣人の安否
の確認や救助の協力態勢からは地域

の絆の強さを感じます。

この地でも、流言（この村では
千二百人の暴徒がくる）は一日の午後
四時か五時には飛び交い始めていたと
書かれています。二日早暁には、壊れ
た鉄道線路づたいに、東の方から続々
と人々がやってきたとあります。

しかし、暴徒ではなく、藤沢、大
船、鎌倉、横浜からの避難民でした。
負傷者を背負った人、その殆どは着
のみ着のままで、村では自分たちも
困っていたが、放っておけず、小規
模ながら湯茶や握飯の接待をした記
述がありました。

東京も横浜も全滅と聞いたのは、
避難者たちからだったようです。
二日午後には三島野戦重砲兵連隊が
到着し、そのことだけで人心不安が
鎮まりはじめたようです。しかし、
三日、四日となっても新聞はこな
かったとあります。

以降、この震災が人々に物心両面
にわたり大きな影響を与えたことが
綴られています。

たやまかたい
田山花袋

1872（明治5）年生まれ。群馬
県出身の小説家。1890年代から
1920年代に活躍。自然主義派の代
表的な作家。震災時は現在の渋谷区
に居住。

・『東京震災記』より

花袋は、震災を記録することにと
ても慎重な作家であったのでしょ
うか。「筆を執ってみようと思うま
でに、震災から一月半以上の月日
が経った。」述べています。

震災記といっても、これは私の
見たり聞いたりしたことだけで、
決して完全なものではない。（中
略）いろいろな記録もいろいろな
新聞記事の記述も引っ張り出して
見なければならないのは勿論であ
る。しかし、そうしたものの多く

は記述と説明で、描写はしていないから、どういことがあったのかは知れても、本当の光景や感じや気分はわからない。(中略)出来るだけやって見ようとしたものであることは事実である。

震災記が不完全になることを危惧しつつ、作家である自分を通して未曾有の出来事と向かい合い淡々と綴られた記録は、今も現役で図書館の棚に場所を得ています。

おかもときどう 岡本綺堂

1872(明治5)年生まれ。東京都出身の小説家。震災時は千代田区麹町に居住。1890(明治23)年東京日日新聞の記者の傍ら小説や戯曲を執筆。1913(大正2)年以降は執筆活動に専念。綺堂の描く江戸は

『半七捕物帳』など長く読まれている。

・『お住の霊 岡本綺堂怪異小品集』
「火に追われて」より

書きかけの原稿用紙をつかんで、玄関の二畳から二階へ通っている階子段を半分以上も昇りかけると、突然大きな鳥が羽搏きをするような音がきこえた。わたしは大風が吹き出したのかと思った。その途端にわたしの踏んでいる階子がみりみりと鳴って動き出した。壁も襖も硝子窓もみなそれぞれの音を立ててゆれはじめた。(中略)玄関の電灯は今にも振り落とされそうに揺れている。天井から降ってくるらしい一種のほこりが私の目鼻にしみた。(中略)第二回の烈震がまた起こったので、わたしは転げるように階子をかけ降

りて再び門柱に取り縋った。それが止むと、少しの間を置いてさらに第三第四の震動が繰り返された。

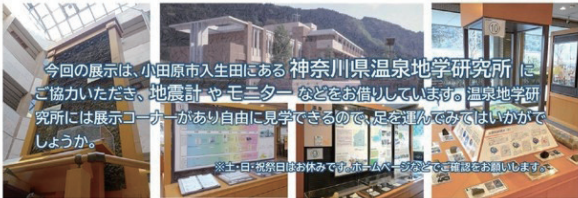
岡本綺堂年譜によると市ヶ谷方面より燃え出でた火が、翌二日夜半に自宅を襲い、午前二時頃に類焼し、家財蔵書のたぐいも全部焼失したと書かれています。焼失したものの中には、十七歳からつけ始めた日記、三十五冊も含まれていました。

■ ガラスケース展示「地震計」 桃トントントン

地震活動の情報発信において、地震と地震計は切り離せない関係にあります。今回の展示では、地震計の写真だけでも準備したいと切望するさなか、温泉地学研究所から実物を

リアルタイム観測中!

ガラスケースに展示している地震計。実は稼働中です!
今、この地震計が感知した振動をモニターに表示しています!



微小地震計ってすごい!

ほんの少しの振動も感知する微小地震計。
どのくらい小さな振動を感知できるのか、試してみましょう!
モニターの波形を見ながら、まずはそつと「トントントン」とたたいてみましょう。波形に変化がなければ、「トントントン」を少しずつ強くしていきます。
たたく場所の目印は、モモ🍑とバナナ🍌です。

振り子の向きに注目!

モモとバナナ、どちらの方が小さな振動でも感知してくれたかな?
「トントントン」とたたく強さは同じでも、振動をあたえる向きによって波形の大きさに違いがでます。これは、地震計の振り子の向きによるものです。そのため、実際の観測現場では「東西」の向きと「南北」の向きの2台、さらに上下振動を測定するための地震計が設置されています。



写真7 (上段) 展示と揺れかたの説明 (下段) 展示の様子: 地震計はガラスケースの中に設置。ガラスケースの枠に表示された桃とバナナをやさしくたたいて揺れを確認しました。(右下) 微小地震計[横揺れ用](神奈川県立温泉地学研究所所蔵)

お借りできるというビッグニュースが飛び込んできました。加えて、地震計を展示させていただけるだけでなく、モニターを通し、LIVE で波形を目視できるという図書館の展示を超えたプレゼントまでついてきたのです。

さて、お借りした地震計は、微小な横揺れを検知する「微小地震計 [横揺れ用]」です。実際の地面の揺れや地震計をたたいた時の様子を子どもたちに見てもらうため、子どもたちも多く訪れる図書館 1 階児童コーナーのあるエントランスに展示することにしました。そこで、お借りした「地震計の保全」と地震計の揺れを目でみて確認できる「貴重な体験」とを考慮した展示が必要になりました。展示の秘策は、「桃トントントン」「バナナトントントン」。地震計が展示されているガラスケースの 2 か所に桃とバナナの絵を張り付けることで子どもたちの目を引

き、やさしい音でたく感触を表現することで、地震計の安全を確保しつつ、楽しく、人気のコーナーを完成させることができました。

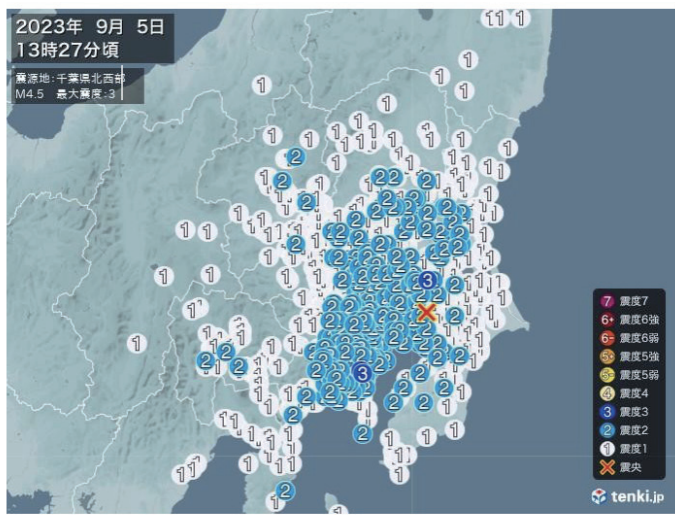
展示当初は、間近で見るこの精密機器に振動を与えてよいものかと、躊躇する姿が見られました。しかし、秘策を授かった見学の方々はいつしか小さな鯨となり、揺れの計測を開始。南北方向の「バナナトントントン」、東西方向の「桃トントントン」と微小地震を発生させて、年齢を問わず自身の鯨エネルギーを確認しました。ある時は家族が目の高さをそろえ、その小さな手が地震を起こしました。波形を揺らした彼らの記憶が、いつの日か未来へとつながることを想像する時ともなりました。

「あ、地震！」地震計が揺れた
地震計の設置後、2023（令和 5）年 9 月 5 日 13 時 27 分頃千葉県北西部でマグニチュード M4.5 の地震

が発生しました。神奈川温泉地学研究所からお借りした地震計に注目が集まりました。幸いにも 1 階児童書カウンターで業務していた司書がその波形を確認することができました。もちろん、事務室のある 3 階からは、すぐさま内線で 1 階に確認。2 階一般書カウンターから 1 階の地震計をめざしたのは言うまでもありません。しかしながら地震の揺れはおさまったあとでした。

後の確認でこの 3 分後、2023（令和 5）年 9 月 5 日 13 時 33 分頃にも地震が発生し、南足柄市で震度 1 との記録がありました。こちらは気づかれることなく図書館は通常業務に戻っていました。

大変残念ながら、地震の波形が画像におさまることはかないませんでしたが、とても貴重な体験をさせていただきました。



発生時刻	2023 年 09 月 05 日 13 時 27 分頃
震源地	千葉県北西部
最大震度	震度 3
位置	緯度 北緯 35.8 度
	経度 東経 140.1 度
マグニチュード	M4.5
震源	深さ 約 70km
神奈川	横浜南区 川崎幸区 川崎多摩区 横須賀市 鎌倉市 逗子市 大磯町 二宮町 小田原市 秦野市 伊豆

発生時刻	2023 年 09 月 05 日 13 時 33 分頃
震源地	千葉県北西部
最大震度	震度 2
位置	緯度 北緯 35.8 度
	経度 東経 140.1 度
マグニチュード	M4.0
震源	深さ 約 70km

図 2 2023（令和 5）年 09 月 05 日 13 時 27 分ごろと 33 分ごろの地震
（出典：日本気象協会 過去の地震情報より）

■ 最後に

『関東大震災、あれから 100 年』と銘打ち開催した企画展示。多くの方々に御覧いただき、資料の収集・保存、そして公開して風化させないことが図書館の意義のひとつだと感じました。過去の記憶や教訓から多くを学び、未来へと継承していく一助になれば幸いです。

今回の企画展示を作成するにあたって多くの方々にお世話になりました。記して感謝申し上げます。また、ここで紹介した図書は当図書館で閲覧可能です。貸出し出来る図書もあるので是非ご来館ください。

■ 展示協力(順不同、敬称略)

南足柄市立南足柄小学校、南足柄市立福沢小学校、南足柄市立岡本小学校、大井町教育委員会おおい自然園園長 一寸木肇、神奈川県温泉地学研究所、相日防災株式会社、国立研究開発法人防災科学技術研究所、大脇良夫、内田昭光、南足柄市防災安全課

本展示のためにご協力いただきました関係各位に深く感謝いたします。

■ 参考文献

芥川龍之介(1996)大震日録, 芥川龍之介全集 第10巻, 岩波書店, 148-151.
芥川龍之介(1996)大震に際せる感想, 芥川龍之介全集 第10巻, 岩波書店, 152-154.
池内了(2021)寺田寅彦と物理学, 玉川大学出版部, 174pp.
石井正己編(2023)大震抄, 文豪たちの「九月一日」, 清水書院, 103-104.
石井正己編(2023)全滅の箱根を奇蹟的に免れて, 文豪たちの「九月一日」, 清水書院, 105-107.
気象庁(2023)「関東大震災から100年」特設サイト, https://www.data.jma.go.jp/eqev/data/1923_09_01_kantoujishin/data.html
北原白秋(1924)白秋全集 VII 歌謡集, アルス(ARS), 511pp.
小宮豊隆編(1992)天災と国防, 寺田寅彦随筆集 第五巻, 岩波書店, 176-188.
小宮豊隆編(1992)震災日記, 寺田寅彦随筆集 第五巻, 岩波書店, 542-554.

南足柄市(1984)関東大震災体験記, 45pp.
南足柄市(1991)南足柄市史 4, 793pp.
南足柄市(1998)南足柄市史 7, 888pp.
日本気象協会, 過去の地震情報, <https://earthquake.tenki.jp/bousai/earthquake/detail/2023/09/05/2023-09-05-13-27-27.html>
岡本綺堂(2022)火に追われて, お住の霊 岡本綺堂怪異小品集, 平凡社, 386-395.
尾崎一雄(1984)あの日この日(上), 尾崎一雄全集 第十三巻, 筑摩書房, 100-131.
彰国社編(1993)建築大辞典, 彰国社, 850.
谷崎終平(1989)懐しき人々 兄潤一郎とその周辺, 文芸春秋, 181pp.
田山花袋(1991)東京震災記, 社会思想社, 288pp.